

# AJCE

# 会報

Association of Japanese Consulting Engineers

Vol.38 No.3



## 特集 日豪交換研修2014



Winter 2015

公益社団法人  
日本コンサルティング・エンジニア協会

# 倫理要綱

## (協会の目的)

公益社団法人日本コンサルティング・エンジニア協会は、技術に立脚した公正なコンサルティング・サービスを提供する知的専門家（以下「コンサルティング・エンジニア」という。）の品位の確立・技術の向上・国際連携の促進を図り、海外コンサルティング・エンジニアとの技術交流およびその成果の普及に関する事業を行い、コンサルティング・エンジニアの技術の発展と科学技術の振興を通して広く社会に貢献することを目的とする。

## (前文)

第一条 会員が、ここに掲げる目的に沿って活動するように、倫理要綱を定める。

## (社会的な責任の認識)

第二条 会員は、コンサルティング・サービスの成果が広く将来にわたって大きな影響を及ぼすことに鑑み、社会的な責任を強く認識しなければならない。

## (顧客利益の擁護)

第三条 会員は、顧客に対し正当にして最善の利益を図るように努めなければならない。  
二 会員は、顧客の利益に役立つと考えるときは進んで他の専門家と協力するよう努めなければならない。

## (公正の維持)

第四条 会員は、コンサルタントが名誉ある職業であることを自覚し、公正な立場を維持しなければならない。

## (独立性の維持)

第五条 会員の職務上の助言、判断または意思決定は、いかなる場合においても第三者または他の機関の影響を受けてはならない。

## (業務報酬の公正)

第六条 会員の受ける業務報酬は、公正なものでなければならず、顧客より支払われる業務報酬のみを受け取るものとする。

## (専門性の保持)

第七条 会員は、自己の専門分野を明確にしなければならない。  
二 会員は、自己の専門外の事項を表示し、あるいは、自己の誇大な広告をしてはならない。また、専門外の業務を引き受ける等、業務遂行につき確信を持ってない業務に携わってはならない。

## (秘密の保持)

第八条 会員は、業務上知り得た顧客の秘密を他に漏らし、または盗用してはならない。

## (他者の業務の尊重)

第九条 会員は、他の会員あるいは同業者の名誉を傷つけ、またはそれらの業務を妨げるようなことをしてはならない。

平成17年4月12日 第202回理事会制定

平成24年4月1日 公益社団法人移行に伴い協会名・目的変更

巻頭言

新年のご挨拶

株式会社建設技術研究所 代表取締役副社長

AJCE 会長 **内村 好** 01

**特集：日豪交換研修 2014**

日豪交換研修 2014 を終えて	<b>磯部猛也</b>	02
YPEP2014 受入報告	<b>安達理央太</b>	03
日豪交換研修報告 2014	<b>坂本淳一・勝本隆博</b>	05
日豪交換研修報告 2014	<b>大坪裕哉</b>	07
日豪交換研修報告 2014	<b>浅井亜耶・林 里樹</b>	09
日豪交換研修報告 2014	<b>鈴木雅彦・中村真也</b>	11
日豪交換研修報告	<b>河井英次・進藤魁仁</b>	13
屋形船夕食会 ヤングサミット	<b>矢神卓也</b>	15

シリーズ・JICA なう 第 5 回

JICA の無償資金協力事業における制度・運用改善について

独立行政法人国際協力機構 資金協力業務部 計画・調整課長

**関 智宏** 17

シリーズ・FIDIC 会員協会の紹介 第 16 回

インドネシア・コンサルティング・エンジニア協会

Ikatan Nasional Konsultan Indonesia

NATIONAL ASSOCIATION OF INDONESIA CONSULTANTS

(INKINDO)

**広報委員会 編** 19

シリーズ・海外だより その 16

インドネシア いろは

パシフィックコンサルタンツ株式会社

**水野 要** 20

国際活動委員会

PSM アプリケーション・マニュアル第 2 版 (PSM II) について

株式会社 日水コン 取締役常務執行役員

**春 公一郎** 21

プロジェクト紹介

南ビンスオン省水環境改善プロジェクトー第 2 期 22

ニャッタタン橋建設事業 24

---

事務局報告	25
一口辞典	26
編集後記	28

---

巻頭言

新年のご挨拶

株式会社建設技術研究所 代表取締役副社長  
AJCE 会長 内村 好



皆様、新年明けましておめでとうございます。平成 27 年の年頭に当たり、会員の皆様ならびに日頃ご支援頂いております関係各機関の皆様へ新年のご挨拶を申し上げます。

日本コンサルティング・エンジニア協会 (AJCE) は、昨年、創立 40 周年の節目を迎え、7 月 9 日には FIDIC 会長の Pablo Bueno 氏を迎えて盛大に式典が開催されました。FIDIC 会長からは、多様化し複雑化する世界において持続性のあるインフラ整備でコンサルティング・エンジニア (CE) の果たす役割が一層重要となっており、その中での FIDIC ならびに AJCE への期待の言葉が述べられました。40 年前に FIDIC へ加盟して世界への扉を開き、CE の国内外における社会的地位の向上に努力された先人たちに感謝しつつ、我々は 40 年の歴史を超えて、新しい途を進むことを決意しております。

昨年の FIDIC 大会は南米大会初の大会としてブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催され、世界中から約 70 ヶ国 700 名、日本からも 36 名が参加しました。大会テーマは “Innovative Infrastructure Solutions” で、世界中には水道や電気など基本的なインフラの恩恵を受けない人々が 10 億人規模で存在する中で、CE は人々の生活の質を向上させる責任を負っており、財政的制約の中でも環境へ配慮し、革新的な技術で資金調達から建設、運営までの解決策を提供しなければならないとの主張が込められていました。ブラジルは GDP では世界第 7 位の大国となり二年後のオリンピックを控えた資源豊かな国ですが、リオの市街から一歩足を踏み出すと多くの人々が住む貧民街が広がっています。基本的な生活や安全を守るためのインフラ整備と我が国のような成熟した社会にお

けるインフラ整備との違いを改めて認識させられました。

またリオ大会では、FIDIC 会費規則の改訂が審議され承認されました。改訂の背景は各国の GDP と納入会費のアンバランスを解消することにあります。会費と GDP の関係を見ると総じて欧米諸国が高い比率であり、アジア諸国は低い比率となっています。日本の GDP は世界第 4 位でありながら会費順位は 19 位となっています。CE 産業の歴史的発展過程や産業構造が異なることから一概に GDP で議論することはできませんが、AJCE が真に日本を代表する CE 協会として FIDIC に加盟するためには避けて通れない道であります。(社)海外コンサルティング企業協会 (ECFA) と昨年 6 月に連携促進の覚書を締結し、現在、双方の委員会からなる連合協議会を継続的に開催しております。このことを第一歩として近い将来、我が国 CE 産業を代表して国際的な活動が一層強化されることを期待しております。さらにその先には国内外や分野を問わず CE が大きく連携して活動する日が来ることも初夢として見ております。

最近の FIDIC 大会では Young Professional (YP : 若手専門家) や女性エンジニアの活躍がクローズアップされています。昨年 10 月には豪州協会 (Consult Australia) から 6 名の YP が来日し、各企業で 3 週間の研修を終えました。1996 年からこれまで延 130 名以上の YP が相互に研修を受けました。これらの若い力が国際交流とこれからの CE 産業の発展を支えてくれることを信じております。

会員や関係各位の皆様のみますのご健勝と一層のご支援をお願いいたします。

特集：日豪交換研修 2014

## 日豪交換研修 2014 を終えて

株式会社建設技術研究所 理事 国際部長  
技術研修委員会副委員長 礒部 猛也

1996年以来継続して行われている、日本とオーストラリアの若手コンサルティング・エンジニアが相互に交流する日豪交換研修 (Young Professionals Exchange Program YPEP) 2014が、本年もオーストラリアから6名の若手技術者の研修生を受け入れることで実施されましたので、その結果を報告します。

今回は、10月14日から31日までの約3週間の予定で研修が行われました。14日の初日は、6名の研修生および日本側の受入企業の担当メンターの方々が一堂に会してのオリエンテーションが開催されました。5月から行われていた研修生と受入企業側メンターとのメールベースでの相互理解および課題図書「日本タテヨコ; Japan As It Is」による事前研修により、研修生全員による日本語での自己紹介で始まりました。時間的に余裕があり、フリーディスカッションはどうなることかと少々心配されましたが、研修生全員が意気軒昂で活発な討議ができ、事前の研修で今回の研修が十分意義深い内容となるであろうことが察せられました。

翌15日からは、各受入企業での研修が行われましたが、事前研修の成果により非常に内容の濃い盛りだくさんの研修が行われたようでした。何人かの研修生は、東京だけではなく、東北の被災地や広島や大阪といった地方での研修も行われたようで、東京といった国際的な大都市ではなく、地方における日本の実情も十分に学ぶことができたのではないかと思います。

25日～26日には、京都、奈良へのツアーも行われ、初めての新幹線への乗車や日本の伝統美や和風旅館において座敷で布団に寝るなど、普通ではなかなか経験できない貴重な経験をして、一様に感激したようです。また、最

終週には、屋形船による懇親会も開催され、参加者一同大変満足されたようです。

受入企業の社員宅にホームステイした研修生のインパクトは非常に大きかったようで、日豪のビジネスの違いを習得する以外に、日本のコンサルティングエンジニアの日常のプライベートに触れることができたことは、非常に有意義なことであったと思われます。

最終日に行われた研修報告・討論会「Young Summit」は、AJCE技術研修委員会YP分科会により運営され、特定テーマに基づくグループ討議の後、各グループが発表するというスタイルで行われました。各グループに研修生が一人ずつ配置されましたが、発表内容はいずれも共通点が多く、異なる受入企業で研修を受けたわけですが、ほぼ同じような研修成果であったことが推察されました。活発な討論会の後は、カニ三味のFarewell Partyが開催され、AJCEの内村好会長も参加され、最後の楽しい交流が行われました。

小職も初めて参加させていただき、かねてより聞き及んでいた評判どおり、非常に意義深い研修であったと感じました。研修生および受入企業のメンターはもとより、双方の企業間においても、今後の人的ネットワークの構成等将来にわたっての良好な関係構築に発展することを願うばかりです。

今回も成功裡に日豪交換研修は幕を閉じましたが、これも一重に受入先会員企業のご支援と担当された多くの社員のみなさまのご協力の賜物であると思います。今後とも引き続き、日豪交換研修発展のご支援をよろしく願います。

特集：日豪交換研修 2014

## YPEP2014 受入報告

株式会社日水コン 水道事業部東京水道部技術第四課

安達理央太



弊社((株)日水コン)では2014年10月14日～10月31日の3週間にかけて、YPEP(日豪交換研修)研修生Daniel Leong-Scott(Parsons Brinckerhoff社)を受け入れた。以下に概要を報告する。

## 1. 研修プログラム概要

## 1.1 事前研修(安達)

事前研修として、メールにより研修に関する希望や宿泊場所の手配状況を連絡した。彼の専門は上下水道施設の構造設計だそう。また雑談などを通して興味の対象を把握し、お互いの人間的な理解を深めた。その過程で「ウイスキーが好き」という重要事項を聞き出し、日本での飲みにケーションには問題ないことを確認した。酒好きということに加えて、なかなかのスポーツ青年のようである。

## 1.2 お迎え～全体オリエンテーション(安達)

研修開始日の朝、彼が宿泊するホテル(会社から徒歩5分)に迎えに行った。今回はフライトの到着前後に台風が通過しており、「無事着陸できるのか?」と一同気を揉んでいたが、何事もなくチェックインできたようだ。初対面の彼はメールでのやり取りの感触そのままの好青年であった。その後全体オリエンテーション会場に移動し、ジャパニーズNomikaiの洗礼を早くも受けた後、一日目が終わった。

## 1.3 社内オリエンテーション+歓迎会(小川)

初日のオリエンテーションは管理本部が担当。自己紹介、スケジュール確認や注意事項伝達を終えた後、「会社紹介」と「ビジネスマナーレクチャー」を行った。会社の特色や各事業部の概要を紹介しつつ、こちらからも質問を投げかけ、インタラクティブな時間になるよう心掛けた。ビジネスマナーに関しては、実践も行いつつ、日常生活で必要な、挨拶・ルール・決まり事、その背景にある日本人の思考様式について伝えた。



社内での歓迎会

夜の歓迎会では、社内各部所から社員が集まり、早速、乾杯の挨拶・お酌・一本締めなど日本の社会人の付き合いを経験・実践していた。

## 1.4 自己紹介タイム(安達)

事前研修の折に頼んでおいた、Danielの業務経験紹介と会社紹介のプレゼンをしてもらった。企業としての従業員が世界全体で14,000人、というところにまず弊社の人間がみな驚く。彼の会社が「ニューヨークで最初の地下鉄をつくった」、「パナマ運河を設計した」などスケールの大きい逸話がぼんぼん飛び出し圧倒されていたが、技術的な話になるとやや落ち着き、質疑応答などが活発に交わされていた。

## 1.5 技術に関する研修(安達、吉井、渡邊)

まず水道部門の研修として、メタウォーター(株)にご協力いただき横浜市の川井浄水場を訪問した。施設内では浄水処理や太陽光発電の様子を見学した。なかでもタブレット端末とクラウドを活用した最先端の点検・維持管理手法に感銘を受けていたようである。

また、水道部門と下水道部門の合同企画として、東北の被災地視察を実施した。現在では被災施設やがれき等はある程度処分されており、地震や津波の爪痕は薄れてきているが、それでも現地に残っている半壊した町庁舎や被災後・復興の様子などを目の当たりにしたことで、彼の中に何かが残ったのではないかと信じている。また、この訪



浄水場見学



構造設計部との一日

間は私達日本の若手技術者にとっても貴重な経験であった。

訪日二週目のうち二日間は構造設計部が担当した。母国では上下水道部門の構造設計業務が主担当ということで解析手法については既知のものが多かったようだ。内一日は実際にソフトを使って解析作業を行ってもらったのだが、業務で使用しているソフトと使い勝手が似通っていたようで、一日で計算が流れるまでのモデルを完成させていた。解析そのものよりも、日本の耐震性能に対する考え方について話したほうが良かったのだろうか、というのが反省点であった。

下水道部門の研修としては、前田建設工業(株)にご協力いただき現在施工中である川崎市大師河原貯留管の施工現場見学を行った。当該施設は、浸水対策及び合流改善を目的とした直径5m・延長2kmの大規模な貯留管施設である。全長2kmの管内を往復で4km約1時間かけて踏破し、ややくたびれた様子であったが、オーストラリアではこのような大規模な下水道施設は珍しいとのこと、新鮮な驚きを感じているようであった。

## 1.6 京都・奈良旅行+日本文化体験プログラム (小形、白崎)

日々の業務や飲み会も日本文化の一面だが、AJCEの京都・奈良旅行及び、管理本部の日本文化体験プログラ

ムは日本文化の伝統的な側面を体験する機会となった。

京都・奈良旅行では英語のバスツアーに参加し、歴史、寺と神社の違い、七五三の風習など多くを学んだ。Danielは終始、ガイドの言葉に耳を傾け、質問をするなど積極的に旅行を楽しんでいた。ただし布団での睡眠だけは慣れなかったようである。

日本文化体験プログラムには、帰国後に周囲へ伝えたい日本独自の体験をして欲しいとの思いから、香林院での写経と根津美術館庭園での喫茶体験を組み込んだ。ここでもDanielは多くの質問をしつつ、積極的に取り組んでいた。帰りに我々の「Hospitality」へ謝意を示してくれたので、「おもてなし」の日本文化も紹介できたようだ。

## 2. おわりに

日豪交換研修に関わる度、「mentor」という何か重い響きの言葉を意識する。今回の研修プログラムを通して「かけがえのない経験をして帰ってもらおう」と意気込み、たしかに実現していることを実感はするが、同時に私達も何かしら教えられる部分が多い。人間関係である以上、どちらも「mentor」であり「mentee」なのではないかと思う。

最後に、この研修を企画・運営していただいたAJCEとCA、研修中・後を通してお世話になった皆様、そしてDanielに御礼を申し上げてこの稿を締めたい。Arigatougozaimashita, Mata Aimashou!



なまはげとツーショット



日本語でのフェアウェルスピーチ

### 研修に携わったメンバー



吉井 啓貴



小形 駿介



小川 玲



渡邊 香澄



白崎 照長

特集：日豪交換研修 2014

## 日豪交換研修報告 2014

中央開発株式会社 技術センター企画室

坂本 淳一



中央開発株式会社 総務部

勝本 隆博



### 1. はじめに

弊社は、今回初めて日豪交換研修の受入企業として参加し、URS社よりDavid Dixon氏（以下、デービッド）を受け入れました。デービッドは2009年にも本研修に参加しており、今回が2度目の参加でした。本稿では、5月中旬から9月末までの約4ヶ月半の間に実施した事前研修と約3週間に及ぶ訪日研修について報告します。

### 2. 事前研修

事前研修では、主に訪日研修の内容や日本でやりたいことの確認・調整を行いました。また、お互いの趣味等についても情報交換を行い、彼が純米大吟醸の大ファンであることも確認できました。

個別課題は、デービッドが鉄軌道のエンジニアであることから、オーストラリアの鉄道（鉄道事情、利用目的、構造的特徴、維持管理、安全対策等）に関する技術資料を作成してもらいました。共通課題である日本語の挨拶については、事前に送信してもらった挨拶文を少しだけ添削しました。

### 3. 訪日研修

来日してからの研修プログラムは、デービッドの専門分野だけでなく、弊社が携わっている事業を幅広く体験してもらうような構成としました。以下に研修内容を示します。

#### (1) 事前研修の発表

事前研修で作成したオーストラリアの鉄道に関する技術資料について、プレゼンテーションしてもらいました。周知の通り、オーストラリアは広大な国土を有しているため用地での制約がほとんどありません。地形的条件の厳しい場所を避けて鉄道を敷くことができるため、トンネルはほとんどないとのことでした。維持管理用の通路もしっかりと余裕をもって確保されており、日本とのスケー

ルの違いを実感しました。



写真1 事前研修の発表の様子

#### (2) 鉄道関連の施設見学

今回、(公財)鉄道総合技術研究所のご協力をいただき、国立市にある施設を見学させていただきました。同研究所は、国内のみならず国際的にも認められる我が国を代表する鉄道工学の研究開発機関です。研究内容のレクチャー、施設や試験装置の解説など、デービッドにとって有意義な内容であったと思います。

また、弊社の有志（鉄道マニア）が集まって、デービッドとともに鉄道施設及び鉄道博物館を見学しました。リニューアルした東京駅丸の内駅舎を視察した後、御茶ノ水方面に向かって歩きました。万世橋駅跡に建つレストランで昼食を取った後、大宮にある鉄道博物館を見学しました。博物館には実物車両の展示だけでなく、鉄道のしくみを学べる施設もありました。また、実物の鉄道レールも展示してあったので、デービッドにはオーストラリアのレー



写真2 公益財団法人鉄道総合技術研究所にて

ルとの違いについて説明してもらいました。

### (3) 地質調査及び土質試験

弊社の主要業務である地質調査の現場を訪れ、ボーリング作業を視察しました。また、弊社にある土質試験室及び土壌分析室を訪れ、実際に一軸圧縮試験や液塑性試験などの土質試験を体験してもらいました。



写真3 ボーリング現場でのデービッド



写真4 土質試験の様子

### (4) 災害現場の視察

伊豆大島では、2013年10月、台風16号に伴う豪雨により甚大な土砂災害が発生しました。弊社では、大学等研究機関との共同研究を通して、災害発生現場に観測機器を設置し、常時モニタリングをしています。今回、デービッドを伴って伊豆大島を1泊2日で訪れ、これらの現場視察を行いました。デービッドは、急斜面も難なく上り下りしていました。



写真5 伊豆大島の災害現場にて

### (5) 観光推進に関する意見交換

弊社では、外国人観光客の受け入れにあたって案内表示の多言語化など、観光推進に関連する業務を実施しています。今回、デービッドには日本を訪れた外国人として、交通機関の案内表示などについて意見をもらうことができました。デービッド曰く、日本は英語表記の案内表示が充実しており、とても分かりやすいとのことでした。

## 4. 文化交流

### (1) サッカー観戦

10月18日、サッカーJリーグ（横浜F・マリノス対清水エスパルス）を観戦しました。観戦後には居酒屋で懇親会を行い、デービッドは升酒を堪能していました。

### (2) 京都・奈良旅行 屋形船

2週目の週末には、AJCE主催の京都・奈良旅行に参加しました。デービッドが、訪れた先々で、抹茶味や麦茶味など様々な味のソフトクリームを食していたことが印象的でした。また、10月29日には、AJCE主催の夕食会（屋形船）に参加しました。デービッドは、初めての屋形船を満喫

していました。

### (3) 社内交流

研修中、若手社員を中心に積極的にデービッドと会話する様子が見られました。

送別会では、彼が好きで毎日食べているベジマイトというペースト状の食品を食パンに塗ってふるまう一幕もありました。その味は味噌に似ていて美味しかったです。



写真6 懇親会の様子

## 5. デービッドの様子

今回が4度目の来日ということもあり、日本に慣れている印象を受けました。航空チケットはもちろんのこと、滞在先も自分で手配していました。

研修中、滞在先から集合場所まで1人で電車に乗って移動してもらったことも複数回ありました。最初は不安に感じていたようですが、徐々に慣れてきたらしく、ある日の帰り道、弊社の作業着のまま、事前に調べていた居酒屋に立ち寄ったことを後日聞いて驚きました。

食事については、日本食の好き嫌いがほとんど無く、京都・奈良旅行での宿泊先で出された懐石料理も残さず食べていました。また、仕草（割り箸の割り方や持ち方、ビールを注がれる際のコップの傾け方、手の添え方など）も慣れていました。中でも圧巻だったのが、送別会で訪れたかに道楽での蟹の食べ方です。身の取り出し方、かに飯を鍋からよそい出汁を注いで食べる一連の動作を誰にも聞くことなく完璧にこなし、フィンガーボールの水を飲むまねをする余裕さえあるほどでした。

## 6. 終わりに

今回の研修は、メンターの2人だけでなく、研修に関わった社員にとっても貴重な経験となりました。

社員からは、「デービッドに聞きたいことや伝えたいことがあるが、上手く英語で表現することができなかった」といった意見が多く、語学力の必要性を改めて認識しました。一方で、これから英語の勉強に取り組みたいと申し出る社員もいました。

最後に、今回の研修は社内外の皆様に協力していただき、無事終わることができました。AJCE、CAの両協会の皆様をはじめ、ご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

特集：日豪交換研修 2014

## 日豪交換研修報告 2014

株式会社オリエンタルコンサルタンツ 交通技術部

大坪 裕哉



## 1. はじめに

今回、我が社にAurecon社からKi Johnson (以下カイさん) を研修生として受け入れました。

カイさんは交通分野に興味があり、弊社における交通分野を担っている交通技術部で10月14日～31日の3週間受け入れることになった。

## 2. カイさんプロフィール

カイさんは現在ブリスベンに住んでいて、道路デザイン、公共交通 (特にライトレール、バス停) の基本設計など交通関係のプロジェクトを専門としている。今回、日本には6度目であり、スノーボードが好きで、北海道のニセコに2回も来ているほか、大学生時代には日本の大学に3か月技術研修にも来たことがあり、日本のことについて精通していた。

## 3. 研修内容

## 3.1 事前研修

日本に来る前に事前研修を実施し、日本語の練習、日本とオーストラリアとのコンサルタントの違い、一般的な工学の違い、文化の違いなど様々な項目についてSkypeを使ってビデオ会議を行った。中でも印象に残ったことは、オーストラリアでは会社での仕事内容が細かく規定されていて、自分のやる仕事が明文化されているという点であった。

## 3.2 研修概要

日本の技術に沢山触れてもらうために様々な現場に行く社外研修と日本でのコンサルタントでの雰囲気を体験してもらう社内研修を行った。

〈研修内容〉

〈社外研修〉

- ・国際会議の参加
- ・東北見学会 (陸前高田市、気仙沼市の見学)
- ・道の駅、サイクルステーション見学
- ・首都高速道路管制センター見学
- ・橋梁見学 (隅田川見学)

〈社内研修〉

- ・情報交換会

・英文資料の要約

## 3.3 研修内容

研修の中で、主な研修内容を紹介する。

## 3.3.1 東北見学会 陸前高田 気仙沼

陸前高田では災害復旧現場で、大規模なくい打ちの様子、レールウェイの修復の様子を見学した。志津川では高速道路の建設の様子も見学し、バス高速輸送システム (BRT) に乗車した。カイさんは悲惨な状況を目の当たりにして悲しみを感じていたが、自然災害を減らすための取り組みや、BRTにより地域ネットワークが再構築されたことに感銘を受けていた。

## 3.3.2 道の駅、サイクルステーション見学

関東近郊にある道の駅、取手駅にあるサイクルステーションを見学した。道の駅というのは日本独自らしく、オーストラリアではガソリンスタンド、ファストフードなどの民間の休憩施設があるそうだ。また、地元の食材が買えることや誰でも使える休憩施設 (広いテーブル) が印象に残っているとカイさんは話していた。

## 3.3.3 情報交換会

交通技術部の部員と一緒に、日本とオーストラリアとの情報交換会を実施した。

私が最も興味深かったことは、発注者との関係である。日本の場合は発注者と受注者といった関係で、上下関係であるが、オーストラリアでは対等な関係であり、その分負う責任も大きい。



写真1 情報交換会

### 3.3.4 社内研修

日本におけるコンサルタントの理解を深めてもらうために、社内でプロジェクトの手伝いをしてもらった。

カイさんは日本のオフィスに興味を持っていた。フロアの中に壁がないこと、始業、終業時間にベルがなることが印象に残っていると話していた。オーストラリアでは、働いているときは時間を意識せず、昼休みも休みたいとき休むため、日本での昼休みに一斉に昼食に行くのも面白い光景に見えていた。



写真2 オフィスでの仕事風景



写真3 鎌倉旅行

### 4.1.2 京都・奈良旅行

本プログラムの研修生とメンターの皆で京都旅行に行った。この旅行に参加した感想として、私自身日本の文化を知らないと痛感し、説明できないというのは恥ずかしいなあと感じた。



写真4 京都奈良旅行

## 4. その他アクティビティ

### 4.1.1 鎌倉旅行

交通技術部の同僚と一緒に、鎌倉に日帰り旅行し、江の島、大仏、鶴岡八幡宮に行った。移動に江ノ電（ライトレール）にのり、車と電車が同じところを走っている様子を見て驚いていた。また、私の家にホームステイをした。我が家に泊まった日に様々なことを話し、上手に英語を話せなくても通じるのだなと思った。あとで分かったことであるが、家を出した食事が口に合わなかったところもあったのだが、気をつかって全て食べていたのも知り、カイさんの性格にも親近感をもった。

## 5. おわりに

社内の各部門や関係機関の数多くの方々に協力いただき、改めてお礼を申し上げます。また、カイさんの優しい性格に助けられ、感謝する気持ちでいっぱいです。3週間は短く、日本での生活に慣れたところで帰ってしまうのはもったいない気がしました。

カイさんとはこれからもkeep in touch と約束をしました。

特集：日豪交換研修 2014

## 日豪交換研修報告 2014

株式会社社長大 社会環境一部

浅井 亜耶



株式会社社長大 社会環境事業本部社会環境三部

林 里樹



### 1. はじめに

今回、弊社ではAurecon社より環境のエンジニアであるRachel Hackettさん（以下、レイチェル）を受け入れました。約3週間の期間のうち、第1週目及び第3週目は東京支社、第2週目は広島支社で研修を行いました。



### 2. 事前準備及び事前研修

我が部では研修生の受け入れは初めてだったので、準備当初はまったくの手探りの状況でした。そのため、過去に受け入れ経験のある弊社社員に話を聞いたり、部内で相談して他拠点への協力を要請したりしながら研修準備を進めました。事前研修はメールでやり取りし、お互いの自己紹介を始め、専門分野、研修で学びたいこと、日本での滞在先、研修スケジュールの確認や調整を行いました。

事前研修課題として、「日本とオーストラリアの環境影響評価制度の違い」についてパワーポイントの作成を指示し、渡日後に弊社の社会環境部のメンバーを対象に発表する準備をして貰いました。

### 3. 国内研修

#### 3.1 社内研修 (in 東京支社)

事前研修課題及びAurecon社の環境事業について発表してもらいました。発表はビデオ会議システムを使って大阪支社の社会環境部のメンバーも参加し、弊社参加者か

らは制度の違いや調査手法について各種質問が出て、日本とオーストラリアの違いについて知見を深める事ができました。

また、現在進行中の動植物調査業務で使用する重要種図鑑の一部を作成して頂き、実際に騒音測定器を用いながら、普段我々が行っている騒音調査方法を体験して貰いました。

#### 3.2 現地視察&現地調査 (in 東京支社)

東京では東京外郭環状道路の建設現場を見学し、狭小日本ならではの建設の進め方や都心部道路のトンネル構造、遮音壁、緑化検討等についての説明を熱心に聞き、写真を撮影していました。

山梨の現場ではパイロット調査に同行してもらい、日本の秋を感じる景観、動植物を説明し、写真撮影による記録者として調査補助をして貰いました。

#### 3.3 現地調査 (in 広島支社)

レイチェルが日本の固有種に興味があるとのことだったので、是非現地調査に出て貰おうと思い、広島でオオサンショウウオ調査及び猛禽類調査に同行して貰い、実際にどのように調査を行っているか、どのような保全対策が取られているかを見学・体験してもらいました。





また、安佐動物公園において日本の固有種を紹介し、同園で研究されているオオサンショウウオの飼育下繁殖プログラムの見学をし、職員の方からオオサンショウウオの保全対策や繁殖飼育等の説明を聞き、それに対して色々と質問をする等、非常に興味を持っていました。

### 3.4 研修成果発表

研修最終日は、研修全体を振り返ったレポートと併せて日本とオーストラリアの保全対策手法について発表してもらいました。研修レポートは本人が体験したことや感じたことについて要点が分かり易くまとめてあり、続けて行われた保全対策手法についての発表では日本とオーストラリアで同じような保全対策が取られている一方、両国に生息する動物種の違いから固有に発達してきた対策もあり、両国の比較は非常に興味深く、有意義な時間となりました。

### 4. 日本文化との交流

研修最初の週末は上司宅でのホームステイを通して「日本の家庭」を体験し、その後、大阪では大阪城や有馬温泉、広島では宮島や原爆ドーム、東京ではお茶席体験等、我が国の伝統文化や歴史に触れてもらったほか、プリクラにも挑戦し、目が通常の2倍になるという最新の若者文化も体験してもらいました。

AJCE主催の京都・奈良旅行では二条城や三十三間堂等の日本の重要な歴史文化財を見学し、レイチェルは特に東大寺の大仏の大きさに圧倒されていました。



また、研修期間中に東京、大阪、広島を訪れたことから、各地のソウルフードである、もんじゃ・お好み焼き・たこ焼き・広島焼きと“粉物食文化”をたっぷり堪能してもらいました。



### 5. おわりに

研修開始当初は計画通り進むか、また、満足してもらえるか非常に不安でしたが、周囲のサポートは勿論のこと、何よりもレイチェルの何事に対しても熱心かつ積極的に学ぶ姿勢に助けられました。

また、私にとっては、初の海外の環境エンジニアと接する機会であり、日本とオーストラリアの会社環境、業務規模、将来目標から私生活の違いについてディスカッションする等、公私の話題でお互いの知識を共有できたことはとても良い刺激となりました。

最後に、このような貴重な機会を与えてくれたAJCE事務局、社内外研修においてサポートして下さった全ての方々に感謝申し上げます。

特集：日豪交換研修 2014

## 日豪交換研修報告 2014

株式会社建設技術研究所 東京本社道路・交通部

鈴木雅彦



株式会社建設技術研究所 東京本社道路・交通部

中村真也



### 1. 研修概要

今回、当社はAECOM社のThomas Meldrum氏（以下、トーマス）を受け入れました。平成26年10月14日～31日の3週間にわたり、彼の専門分野である道路設計や日本の土木技術紹介、日本の文化体験等の研修を行いました。来日前には事前研修として、メールでのやり取りを行い、日本での研修プログラムを練っていきました。

社内研修を除く研修内容を時系列に並べると以下の通りです。このうちいくつかの研修内容について、本稿にてご報告いたします。

- ・大橋ジャンクション視察
- ・週末ホームステイ
- ・東北支社事業紹介（東日本大震災復興現場視察）
- ・NEXCO中日本コミュニケーションセンター見学
- ・京都・奈良研修
- ・大阪本社事業紹介（瀬戸大橋・岡山美観地区視察）
- ・大江戸日本橋舟めぐり
- ・ヤングサミット

### 2. 日本国内での研修

#### 2.1 業務に関する意見交換

研修初日は、オリエンテーションとして、オーストラリアの業務紹介をしてもらいました。彼は、入社して2年は道路設計に携わり、その後1年半は施工管理の現場に出ていたようです。2011年～2013年にクイーンズランド州で複数回発生した洪水の道路復旧に携わっており、その業務について紹介してもらいました。

その後、弊社から日本の道路計画・橋梁の耐震設計・土木構造物の維持管理について各分野の技術者にプレゼンテーションしていただき、意見交換を行いました。



写真1 オリエンテーションの様子

#### 2.2 東日本大震災の復興現場視察

本人の希望もあり、3日間の東日本大震災復興現場視察を行いました。まず初日は、東北支社にて、東日本大震災の概要を説明しました。合わせて復興道路の設計業務についての業務紹介もしていただきました。オーストラリアの道路設計との違いについての意見交換も活発に行われていました。残り2日間は当社が共同企業体として支援している山田町に行きました。そこでは被災した町の復旧・復興事業が行われており、現場視察と事業概要について学びました。最後は陸前高田の「奇跡の一本松」を見学し、東北の視察を終えました。



写真2 山田町CMJVの復興現場の様子

### 2.3 京都・奈良旅行

2週目の週末は、京都・奈良旅行に行きました。外国人を対象としたツアーバスで、全編英語での案内つきでした。私自身も、京都奈良の寺社仏閣を観光するのは、小学生の修学旅行以来で、研修生達はもちろんのこと、日本人メンターもバスガイドの案内に「へー」とうなずく場面があり、とても有意義な旅行になったと思っています。



写真3 京都・奈良旅行（旅館にて）

### 2.4 日本の道路設計について

オーストラリアで彼が行ってきた道路設計は、ほぼ直線のルートですが、日本の道路は国土が狭く土地利用が限られているため、トンネル・橋梁が非常に多くなります。彼の設計した道路をストリートビューで見たり、私の設計した道路の図面を見せて意見交換をしました。

また、日本の道路設計ソフトを使用し、実際にルート作成をしてもらいました。作成した図面は印刷してプレゼントしました。彼は施工管理の現場が長く、道路設計からは遠ざかっていたようで、オーストラリアに帰ったらまた道路設計をやりたい、と話していました。



写真4 NEXCO川崎コミュニケーションセンター

### 3. 日本文化の研修

休日は、東京スカイツリーをはじめとする都内の観光名所に行ったと話してくれました。滞在場所の近くということもあると思いますが、秋葉原には何度も通ったようです。また、お気に入りの日本食はラーメンのようです。



写真5 東北にて、なまはげと

### 4. おわりに

研修最終日、トーマスはメンターをはじめとするお世話になった方々にお土産を配っていました。私は地球の歩き方（もちろんオーストラリア）を頂き、また必ず会おうと約束しました。

本研修の企画、実施にあたり、社内の各部門や関係機関の多くの方々に多大な協力を賜りました。特に、関係機関のご厚意により実現した現場見学は、研修生のみならず同行した我々にも震災からの復旧の状況を間近に触れられる、非常に有意義な機会となりました。

私たちの英語力にはかなり疑問点がつきますが、社外研修に同行してくれた同僚や、わかりやすく話してくれるトーマスのおかげで意思疎通ができていたと思っています。

本研修にご協力いただいたすべての方にお礼申し上げます。ありがとうございます。

特集：日豪交換研修 2014

## 日豪交換研修報告

パシフィックコンサルタンツ株式会社 プロジェクト事業本部鉄道部

河井 英次



パシフィックコンサルタンツ株式会社 プロジェクト事業本部鉄道部

進藤 魁仁



### 1. はじめに

弊社では研修生としてParsons Brinckerhoff社より鉄道技術者のTim Powellさんを受け入れました。

YPEP2014はメールでのやり取りによる事前研修(5月-9月)と来日研修(10/14-10/31)の2部構成で行われました。

本稿では事前研修及び来日研修の概要について報告いたします。

### 2. 研修概要

鉄道技術者であるTimさんから事前に日本の鉄道を学びたいとの要望を聞いておりましたので、日本における鉄道の計画・橋梁・地下構造の3分野を幅広く学んで頂けるように社内研修・社外研修を取り入れたプログラムを作成しました。

また、Timさんは日本の鉄道(特にリニアと新幹線)にも興味があるということを知っておりましたので社外研修の中で鉄道博物館や山梨県立リニア見学センターへの見学も行い日本の鉄道を学んで頂く機会を設けました。

### 3. 研修内容

#### 3.1 事前研修

事前研修ではメールでのやり取りを通し、お互いの自己紹介を行い研修生の専門分野について尋ね研修内容の参考としました。また、オーストラリアの鉄道計画及び歴史と文化のレポートを作成いただきました。

#### 3.2 来日研修

##### 【日本の鉄道について】

研修第1週目は社内研修が主で、日本の鉄道技術について学ぶカリキュラムを組み、主に日本の鉄道の歴史やLRTなどの日本の最新技術を学んで頂きました。

2週目は鉄道部内で橋梁や地下構造について学ぶ機会を設け、Timさんが来日前に希望していた鉄道に関わる設

計や構造について学んで頂きました。

##### 【ホームステイ】

1週目の週末は、千葉市美浜区の河井室長宅で1泊2日のホームステイを行いました。

土曜日は、歓迎会を行い河井家と町井家と共に手巻き寿司を体験してもらいました。

日曜日は、午前中にTimさんと河井室長が海沿いで趣味のジョギングを行い、午後は千葉モノレールに乗り、千葉城の天守閣に登りました。



##### 【鉄道博物館見学】

1週目は座学中心で日本の鉄道について学ぶ機会を設けましたが、2週目以降は日本の鉄道に関してより深く知って頂くために日本の鉄道の歴史が分かり、かつ鉄道技術を体験しながら学べる鉄道博物館へと見学に行きました。ちょうど新幹線が運行開始して50年というタイミングだった事もあり、新幹線の特別展示があり、来日前より新

幹線に興味があったパウエルさんは興味深く資料を眺めていました。また、TimさんにはSLの運転も体験して頂きました。



#### 【京都奈良旅行】

2週目の週末は研修生6名、受け入れ企業からの同行者7名の計13名で1泊2日の京都奈良旅行へ行き、伝統的な施設や建造物に触れることができました。

Timさんは本研修の前に2回来日されている事もあり日本に関わる知識がかなり豊富のように感じました。



#### 【山梨県立リニア見学センター】

最終週はリニアに対して興味があったTimさんが熱望していたリニアの見学を行いました。

山梨県立リニア見学センターではリニアの車両見学や実際にミニリニアに乗車する事でリニア走行の仕組みを学びました。



また、リニア見学センターの他にリニア実験線のトンネルや橋梁や変電所も見学し、研修で学んだ橋梁やトンネルを実際に見学して頂く機会も作る事ができました。

#### 【研修成果発表会】

社内研修最終日では研修成果発表会の場を設け、事前研修で提出して頂いたスライド2本と3週間の研修内容についてまとめのスライド合わせて3本を発表して頂きました。

質疑応答では弊社参加者からオーストラリアの鉄道に関わる質問が出て、活発な議論を行いました。



#### 4. おわりに

私個人としても海外研修の担当者となったのが初めてでTimさんへの対応やスケジュール管理等不安な事が多くありましたが、Timさんの積極的な姿勢や社内外の方々のご協力によって無事に三週間の研修を終える事ができました。

本研修に関わった事で普段経験できないような事も経験する事ができ、受け入れ側としても得られた事や学ぶ事が多く非常に有意義な研修となりました。

最後に本研修にご協力していただいた社内外の皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

特集：日豪交換研修 2014

## 屋形船夕食会 ヤングサミット



株式会社建設技術研究所 東京本社水システム部主幹  
技術研修委員会 YP 分科会副分科会長 矢神 卓也

### ■はじめに

2014年度の日豪交換研修では、研修中の平日夜の公式行事として10月29日（水）に、「屋形船での夕食会」を開催した。また、最終公式行事である「ヤングサミット」が、10月31日（金）に（株）オリエンタルコンサルタンツ会議室にて行われた。以下にその報告を行う。

### ■屋形船での夕食会（10月29日）

研修期間中の夕食会は、日豪研修の初の試みとして開催された。これは、YP分科会で提案されたものであり、日本らしい何かを研修生に体験してもらいたいという思いからである。

当日は、JR浜松町駅近くの「屋形船 船宿 はしや」に集合し、ビジネス街のビルの谷間の小さな川から、屋形船は出発した。船はあっという間にレインボーブリッジをくぐり、お台場に停泊する。はじめのうちは皆、花より団子、と



いうことで、夜景を楽しむというよりは、参加者同士の和気藹々の懇親で始まった。お腹も満たされたころ、めいめい屋形船の屋根に上り、やや肌寒い中にも関わらず、夜景を見ながら研修生との交流が続いた。正味2時間程度のクルーズであったが、最後に林AJCE理事にご挨拶を頂き、盛況のうちに終了した。

### ■ヤングサミット（10月31日）

ヤングサミットは、澤部純浩副分科会長の司会により始まり、研修生6名の研修報告が順に行われた。研修生は、研修内容やオフでの様子を、時には日本語も交えながら楽しく発表し、有意義な研修が行われたことが窺われた。

研修生の発表に続き、高木沙織委員の司会により、グループディスカッションが行われた。6つのテーブルに分かれて、それぞれに研修生1名、日本企業から参加者が4、5名ずつ着席し、以下の2つの課題についてのディスカッションが行われた。

- 話題1：日本と豪州の仕事環境の違いについて
- 話題2：日本と豪州の社会環境の違いについて



話題1 では、主に、2国間での働き方の違いについて議論が行われた。この議題はヤングサミットでは、毎回テーマとして取り上げられているものである。ディスカッションの結果、今回もこれまでと同様に、オーストラリアと比較して日本での長時間労働がクローズアップされる形となった。

主な論点は以下の通りである。

- ・土木技術者の地位
- ・客先とコンサルタントとの立場の違い
- ・客先との契約内容の違い
- ・一人が抱える仕事量とワークシェアリング
- ・雇用の際の人脈保有の重視
- ・長期休暇の長さの違い
- ・フレックスタイム制
- ・転職回数の違い

オーストラリアの企業で導入されている制度は、日本の会社でも取り入れてほしいという意見があった。



話題2では、社会的文化的側面における違いが議論された。

オーストラリアでは、日本と比較した場合に、プライベートでの家族、友達のつきあいに時間を割いている事が垣間見られた。

主な論点は以下の通りである。

- ・日本における飲み会
- ・オーストラリアにおけるBBQによる交流
- ・日本人だけの友人関係とオーストラリアにおける多国籍の友人関係
- ・日本のおみやげの文化

最後に閉会の挨拶として、野崎秀則AJCE理事より日豪交換研修の総括が述べられた。

## ■送別会

ヤングサミットに引き続き送別会が行われ、研修プログラムの最後の夜を皆で語り明かした。



## ■さいごに

ヤングサミットを仕切って頂いた澤部副分科会長、高木委員のおかげで非常に意義のある議論の場を提供することができました。お二方の英語での臨機応変な対応により、スムーズな進行が行われたことに、YP分科会の成長も見る事ができた気がします。ありがとうございました。



## シリーズ・JICA なう 第5回

## JICA の無償資金協力事業における制度・運用改善について

独立行政法人国際協力機構 資金協力業務部 計画・調整課長  
関 智宏



JICA が行う無償資金協力事業については、2008 年の統合時における外務省からの業務の一部移管以降、より良い事業実施のための制度や業務の改善、新制度の導入等に取り組んできました。「無償資金協力の制度は昔から変わっていない」との声をいただくこともありますが、JICA 内のみならず関係省庁との合意形成を進めつつ、大きい部分も小さい部分も含め様々な改善を行ってきています。今般は、導入済みの制度改善の一部と、さらなる改善に向けた現在の動きをご紹介させていただきます。

## 1. 既に実施済みの主な改善事項

## (1) 追加贈与

従来の無償資金協力では、当初想定された事業費を案件実施の過程で超過した場合には、当初の計画の一部を断念することにより総事業費を閣議決定額内に収める、または、超過した事業費分を別案件として改めて採択して実施するといった対応を取らざるを得ませんでした。

従来の対応では、①事業目的の達成が困難、②案件の性格上、別案件として切り分けができない場合がある、③別案件として切り分けることにより間接費等の全体事業費が増加する、等の課題がありました。

2012 年末頃からの急激な円安動向を背景に、為替差損等により事業費が不足する事態が発生した場合に、E/N 額（贈与額）を追加・修正できる仕組みが検討され、2013 年度に「追加贈与」の制度が導入されました。当該案件の贈与額を変更するという「追加贈与」の制度は、追加贈与以前の無償資金協力を知らずの人にとっては画期的な制度変更だと思えます。

なお、2013 年度には 10 案件への適用がなされています。

## (2) 予備的経費

無償資金協力事業における受注者が負うリスクをある程度軽減し、柔軟で円滑な実施のため予備的経費の制度の試行的導入が 2009 年 10 月に決定されました。本制度も上記の追加贈与と同様、重要な制度変更と言えます。

予備的経費の対象となる事象としては、①治安悪化、②自然災害、③自然条件等と設計との相違、④経済状況市場の変化、⑤被援助国政府負担事項の遅れ・不履行による損害——が挙げられます。

予備的経費の対象案件であっても、すべての対象案件において予備的経費を実際に使っているかというところではありません。予備的経費はその趣旨からも、必ずしも使わないで済むのであればそれに越したことはない経費ですが、予備的経費が付いているか否かは、リスクをどの程度見込んで応札するか判断には重要な要素だと思われまます。実際、予備的経費導入前と導入後で比べると、入札不調率に改善がみられるなどの効果も表れています。

現在は対象案件が限定されていますが、その対象を拡大すべく検討・協議中です。

## (3) プログラム型無償

紛争・災害からの復旧・復興の段階では、多様かつ変化するニーズに迅速かつ柔軟に対応することが求められます。その必要性に応えるため、一つの案件（プログラム）の下で、複数の案件（サブプロジェクト）の実施を可能とするプログラム型の無償資金協力の制度を今年度導入しました。

一つのプログラムの中でのサブプロジェクトは、調査の進捗によって実施可能な案件から進めることも可能ですし、サブプロジェクト間の予算の融通も制度上は可能

としています。また、一般プロジェクト方式や調達代理方式などの調達方式を混在させることも可能としています。現時点では2件の実例があります。

## 2. 現在の動き～包括的改善に向けて～

無償資金協力事業を取り巻く状況や同事業に求められることが変化していくのに応じて、制度及びその運用の仕方も見直し・改善をしていく必要があります。新たな課題も見えてきます。現在、JICAにおいては、関係部署の垣根を越えて無償資金協力全般の各課題を改めて洗い出し、部横断的に包括的改善に向けた取り組みを行っています。

まず、「リスクに柔軟に対応する制度改善」です。無償資金協力事業の実施において、生じうるリスクを低減させるために、先方負担事項の順守を促す工夫の検討や、柔軟なリスク対応が可能となるような契約条項の設定などの改善を行っていきます。

次に「事業関連事務の適正化・軽量化」です。関連手続きの改善、資金管理の改善等を行うことによりJICAのみならず受注者の業務軽量化を目指します。

また、相手国政府とJICA間のG/A (Grant Agreement: 贈与契約) の内容や業者契約の内容の見直しも進めています。従来、必ずしも明確に規定されていなかった関係者の役割分担をより明確に記載することを考えています。

その他、多様化するアクター及び多様化するニーズに対応するための新たな手法の導入や、無償資金協力の戦略性・予見性をより高めるための取り組み、品質確保に向けた取り組みや持続性の確保に向けた取り組みを推進していきます。

より良い制度、より柔軟な運用、より"魅力的な無償資金協力事業"を目指していきたいと考えています。関係者のみなさまのご協力をお願いいたします。

## シリーズ・FIDIC 会員協会の紹介 第 16 回

### インドネシア・コンサルティング・エンジニア協会 Ikatan Nasional Konsultan Indonesia NATIONAL ASSOCIATION OF INDONESIA CONSULTANTS (INKINDO)

広報委員会 編

#### 1. 概要

インドネシアは、ご承知の通り、スマトラ島、ジャワ島、ボルネオ島など多くの島国からなる国であるが、その総面積は日本の 5 倍に相当する約 190 万平方キロメートルである。人口も、現状では約 2.5 億人と世界第 4 位の巨大な人口を抱えた国といえる。

インドネシアのインフラ整備に係る主要課題は、ジャカルタなど大都市での交通渋滞、電力設備増強、人口増加に伴う上下水道の整備（ジャカルタの下水道普及率は 2%）などである。

インドネシア協会（以降は INKINDO とする）には、国内のコンサルタント会社だけでなくインドネシアで業務を実施している国際的なコンサルタント企業もメンバーとして加盟している。

INKINDO は、1970 年ころ設立された 2 つの協会、IKINDO（インドネシアコンサルタント協会）と PKTPI（コンサルティング技術者協会）が統合し、1979 年に設立された。協会のメンバーは拡大しており、地理的にもサービシ的にも拡大に向かっている。当初、6 州 107 のメンバーであったが、今日では 33 州（全部で 34 州からなる）7000 のメンバーまで拡大している。FIDIC の会員拡大とともに、地理的にも、活動すべき事項も拡大してきた。



#### 2. ビジョンとミッション

INKINDO は、以下のようなビジョンとミッションを掲げて活動をしている。

##### (1) ビジョン

「メンバーは、公正で豊かな社会の実現のために、国の技術開発や技術者の育成を支援する」

##### (2) ミッション

- ・メンバーの共同の推進
- ・倫理規定および行動規範に則って威厳のある整然とした規律と信頼性の高いコンサルタントとなること
- ・国の発展のために、参加メンバーを増やすこと

- ・ユーザーへの最高のコンサルタントサービス提供を促進すること
- ・メンバーの保護

#### 3. 協会行動規範の概要

インドネシア協会では、7 条、21 項目にもわたる行動規範を規定している。

- 第 1 条：職業倫理について、同業者を尊敬することや違反をしないこと、相応しくない行動は取らないなどを規定
- 第 2 条：公正な活動の実施については、適正なサービスの提供や相応しい人材の投入、必要に応じた他の専門家との共同など
- 第 3 条：企業間の交流や連携については、技術交流を行い、互いに協力することなど
- 第 4 条：適正な報酬については、能力やサービスに応じた報酬など
- 第 5 条：職業への自負と同業者への尊敬
- 第 6 条：腐敗防止については、贈与や談合などの防止について
- 第 7 条：専門家としての業務遂行と共同

#### 4. ホームページ

Website: <http://www.inkindo.org>（インドネシア語）

Email: [inkindo@inkindo.org](mailto:inkindo@inkindo.org)

参考資料：ASPAC ニュース

<http://www.ajce.or.jp/fidic/ASPAC/ASPAC.htm>

#### 5. 連絡先

Telephone: +62 573 85 77

Fax: +62 573 34 74

Location:

Jl. Bendungan Hilir Raya No. 29

Jakarta Pusat 10210 Indonesia

## シリーズ・海外だより その16

## インドネシア いろは

パシフィックコンサルタンツ株式会社  
水野 要



執筆中の11月初旬、インドネシアは3月までの長い雨季への変わり目です。10月頃からジャカルタ市内では、あちらこちらで側溝や埋設管の補修工事が。人力で掘起こされた赤土の山



がよく見られます。比較的小さな側溝は、年々回数の増える大雨の都度、バンジール（洪水）とも呼ばれる道路冠水の原因となります。ですからあせって工事しているかといえば、この国の方のおおらかさからでしょうか。ぼつぼつ降り出した雨の中でも現場は鼻歌混じり。よく使われるインドネシア語「ティダアバアパ=気にしないで・何とかなるさ」を体現している景色は、通勤時にジャカルタ名物大渋滞（マチュット）に巻き込まれてる間でも、ニヤリとさせてくれます。

インドネシアは先月に新しい大統領ジョコ・ウィドドさんが就任。現職州知事からの転身と、平和な政権交代を同時に成功させた政治家の下、インドネシア経済は成長の期待に満ちています。ジャカルタ市内には、先に柱と床だけが作られる高層ビルの現場が、さらに増えそうです。それを見ながら、時々既視感がどこからくるか考えてみると、私が子供のころにはまだ続いていた、高度成長期時代の景色にそれにそっくりなことに気がつきます。当時と少しだけ違うことがあるとすれば、既に携帯電話があることと、収入格差がよりはっきり見えることでは



うか。

市内のショッピングモールには、日本食も含め多くのレストランがあります。ここで平日の夕食をとれば、お酒なくとも1食2～3,000円程度。より高いお店では10,000円にも。一方、町の屋台に行けば

200円です。これらが細い裏道を隔て隣立している景色が、この国の成長の様子を可視化してくれています。

しかしそれでも、この国の方の良い意味のおおらかさは、そんなことは些細と笑い飛ばしてくれます。これを直にご覧になりたい方には、大道芸をお勧めします。

ジャカルタ市内、海側の街コタ（KOTA）には、オランダ植民地時代の建物が残っていて、多くの観光客が訪れます。広場にはこれを見込んだ、実に「キラキラ=だいたい、おおよそ」な芸を披露する方が。秀逸なのは静止芸です。軍人の銅像を模して体を銅や銀に塗った芸人が、ぴたっ!と止まって・・・1分で確実に動き出します。1度動き出したらもう次々と。10秒も止まっていられなくなり、むしろ観光客におもちゃの銃を渡して、記念写真を撮らせたり、目を凝らせば周りには黄色や緑のピンクで闊歩する軍人がいたり。インドネシア真の伝統芸能は早めにご賞味ください。

かくいう私も、現地の仲間から見るとなかなかいじりやすい人間らしいです。入国して浅いころ、勤務後、帰宅のために車に向かうと、ドライバーやガードマンが一斉に、「Happy Birthday♪」を歌ってくれたのです。感激したのですが、問題は私の誕生日が半年先だという点。先輩に何うと、こちらでは誕生日を迎えた本人がケーキを配るとの事。「つまり奢れってことでしょうか?」「そうだね。たかられてるね」「先輩言われたことは?」「ないよ。」「……」。や、でもあれですね。早々になじめたってことですよ。最近はお菓子のおすそ分けもってきてくれたりするし……。なんて悩んだりいたしません。

マレー語を親とするインドネシア語では、「どういたしまして」は「サマサマ“sama sama”」です。「サマ“sama”」1回だったら「同じ」。「同じ同じ」が転じて「一緒に」、「お互いさま」そして「どういたしまして」に。

こんな素敵な言葉を使っているインドネシアの方たち。人懐っこさを味わわなかったら、この国の魅力の半分が気がついていないといえましょう。

「Kamu lucu! (君面白いね!)」「サマサマー!」

## 国際活動委員会

## PSMアプリケーション・マニュアル第2版 (PSM II) について

株式会社 日水コン 取締役常務執行役員  
春 公 一 郎



持続可能な開発に関して、インフラのライフサイクルに大きく影響を与えるコンサルティング・エンジニア (CE) の果たすべき役割は極めて重要である。そのような認識のもと、FIDIC は持続可能性委員会 (SDC) を中心に長年業界のオピニオンリーダーとして積極的な発信を続けている。

プロジェクト・サステナビリティ・マネジメント (PSM) は、FIDIC が提唱している新たなビジネス・モデルで、持続可能性向上をプロジェクトに盛り込むためのマネジメント手法である。建築分野ではすでに LEED や SPeAR、我が国の CASBEE などの持続性評価認証システムが存在しているが、これをインフラ全体に広げようという意図がある。持続可能性に関わる目標を、社会面、経済面を含めて設定し、達成度管理を行うが、プロジェクトの環境に対する好影響についても評価する点が特徴となっている。

FIDIC は 2004 年に第一弾である「Project Sustainability Management ガイドライン」(PSM I) を発行した。コンサルタントがプロジェクトに関わる際に発注者との議論に利用することを意図したものである。このガイドラインは PSM という概念の導入に一定の貢献をしたものの、指標が多く複雑過ぎる、途上国寄りといった課題があった。

これを改善すべく 2008 年より改訂作業に着手、特に目標設定の基礎となる指標の在り方を見直し、2013 年に発刊されたのが「Project Sustainability Management アプリケーション・マニュアル第 2 版」(PSM II) である。元 FIDIC 会長のボイド氏を中心となって作成し、FIDIC 創立 100 周年を迎えたバルセロナ大会において、サステナビリティ・パックの 1 冊として刊行された。なお、PSM II は I と同様多分にコンセプチュアルな内容にとどまっているが、今後、マニュアルや事例など多くのドキュメントを追加作成していく予定としている。

現在、国際活動委員会 FP 推進分科会において、この PSM II の翻訳作業を進めており、いずれ、本誌にて概要版を報告することを企画している。

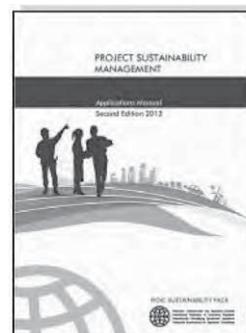
方法論的には、PSM I と II に大きな違いがあるわけ

ではない (むしろ PSM I の方が流れを感覚的に把握しやすい印象もある)。できる限りプロジェクトの上流段階で、施設の建設から廃棄に至るまでの全供用期間に重大な影響を及ぼす事項を特定し、顧客の意向も踏まえたうえでプロジェクト固有の目標を設定、プロジェクトをより持続可能たらしめる代案を検討し、その効果を検証するという流れである。コンサルタントは単に設計するだけでなく、廃棄時には別の場所で再利用する事なども考えていく必要があるし、また、単に道路を新設するのではなく、より持続可能な交通手段を提案するという関わり方もあるはずである。このようなアプローチを、顧客とのコミュニケーションは当然のこと、ステークホルダーの関与のもとで実施していく。

PSM II で改善された点として、指標の単純化が挙げられる。PSM I においては国連の策定した 65 指標が列挙されており、その数の多さが複雑な印象をもたらしていたが、PSM II においては、これを「水」「エネルギー」「資源」「環境」「健康・安全」「人権」の 6 つに括り、わかりやすくしている。前 3 者は、有限資源の消費を抑制するカテゴリであり、後 3 者は、プロジェクトの影響を受けるコミュニティの環境を保全・改善することを意図したカテゴリである。これらの項目ごとに「重要度」「影響度」「貢献度」「関心度」の度合いを定性的に評価し、優先順位を設定する。そして、選定されたカテゴリに対して目標を設定し、持続可能な代案を立案、その影響や効果について検証していくといった流れで、プロジェクトの持続性を高めていく。



PSM I, 2004



PSM II, 2013

## プロジェクト紹介

### 南ビンズオン省水環境改善プロジェクトー第2期



サイト	ベトナム国ビンズオン省
事業実施者	南ビンズオン省水環境改善プロジェクト管理委員会 (PMU)
資金	JICA 円借款
実施期間	2013年6月～2018年6月
事業内容	詳細設計、入札支援及び施工監理

#### 事業概要

このプロジェクトの目的は、ビンズオン省 Thu Dau Mot 市の第1期で建設した污水管路網を拡張することと Thuan An 町に新たに下水処理場及び污水管路網を建設することによって、省西部を流れるサイゴン川の水質改善、及びサイゴン川下流に位置するホーチミン市地域の住環境改善に貢献することである。

このプロジェクトは、以下の6つのパッケージから構成されている。

#### パッケージ名

1. LCB/01: Thuan An 下水処理場の盛土工事
2. LCB/02A: Thuan An 下水処理場のアクセス道路及び水路沿い道路の建設工事
3. ICB/02: Thuan An 町の下水処理場建設工事
4. ICB/03: Thuan An 町の污水管路 (ポンプ場を含む) の建設工事
5. ICB/04: Thu Dau Mot 市の污水管路 (ポンプ場を含む) の建設工事
6. MS/01: 下水処理場の維持管理機材の調達

#### 対象エリア

このプロジェクトにおける対象区域は、以下に示す2つの下水処理区である。下水処理区 (図-1 内、-- 点線) と下水処理場の位置は図-1 に示すとおりである。

1. Thu Dau Mot 市下水処理区 (第1期の拡張: 1,911ha)
  - ・ Chanh Nghia、Phu Cuong、Phu Loi、Phu Tho、Phu Hoa 及び Hiep Thanh の6地区
  - ・ An Thanh 及び Thuan Giao の2地区

#### 2. Thuan An 町下水処理区 (3,094ha)

- ・ Lai Thieu、An Phu、Vinh Phu、Thuan Giao 及び Binh Hoa の5地区

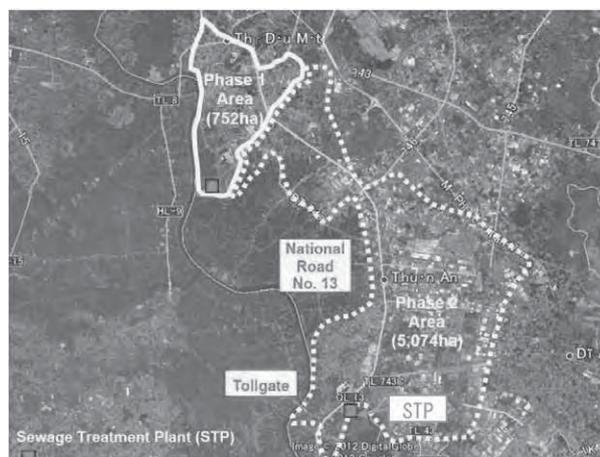


図-1 下水処理区及び下水処理場 (STP) 位置

Thuan An 下水処理区の下水処理場 (STP) の完成予想図は、図-2 に示すとおりである。



図-2 下水処理場 (STP) の完成予想図 (Vinh Phu 地区、Thuan An 町)

## 事業内容

次表に示すとおり、Thuan An 下水処理区の下水処理場は、当初 17,000m<sup>3</sup>/日の処理能力で建設される。

下水処理場	
敷地面積	6.9 ha
処理能力	当初：17,000m <sup>3</sup> /日 (最終：51,000m <sup>3</sup> /日)
処理方法	活性汚泥法
汚泥処理・処分方法	脱水・埋め立て
放流先	サイゴン川

ポンプ場	
Thuan An 下水処理場の主ポンプ能力	54.00m <sup>3</sup> /分
中継ポンプ場	Thu Dau Mot：10 基 Thuan An：18 基

分流式下水道(汚水管路)			
処理区 管路	Thuan An	Thu Dau Mot	合計
幹線 (自然流下)	66km (φ225～φ1200)	38km (φ200～φ630)	104km (φ225～φ1200)
幹線 (圧送)	8km (φ110～φ400)	5km (φ110～φ450)	13km (φ110～φ450)
枝線 196km	196km (φ110～φ160)	153km (φ110～φ160)	349km (φ110～φ160)
合計	270km (φ110～φ1200)	196km (φ110～φ630)	466km (φ110～φ1200)

## コンサルティングサービス業務

本プロジェクトにおけるコンサルティングサービスの主な業務は、詳細設計、PMU への建設工事入札支援及び工事監理である。

より具体的な業務は以下に示すとおりである。

### 1. 調査・測量

- ・対象下水処理区内の地形測量、地質調査、水文調査及び確定した敷地境界調査
- ・公共施設調査

### 2. 詳細設計

- ・承認済み事業計画のレビュー及び最適技術の提案
- ・基本設計、既存調査及び提案されている最適技術のレビュー
- ・下水処理場、汚水管路網及び中継ポンプ場の詳細設計
- ・各施設に対する全体及び詳細な実行計画の作成
- ・各施設に対する事業費の算出

### 3. 入札図書作成、入札支援及び入札評価

- ・事前資格審査(PQ) 図書及び入札図書の作成
- ・PQ 及び PQ と入札評価を含む入札支援の実施
- ・契約交渉での PMU への支援及び契約図書の作成
- ・JICA との連携

### 4. 工事監理

- ・位置出し(セッティングアウト)
- ・コントラクターから提出された施工図、設備図、施工計画書の評価及び承認
- ・コントラクターから提出された工事工程表の評価及び承認
- ・ベトナム国建設省令第 15 号に準じた品質監理
- ・仕様書に準じた数量管理
- ・ベトナム国環境天然資源省に承認された環境影響評価(EIA) に準じて、コントラクターから提出された環境モニタリング計画及び環境モニタリング報告書の評価及び承認
- ・コントラクターから提出された安全計画(交通、労働、検査の実施等) の評価及び承認
- ・工事進捗月報、四半期報告書、工事完了報告書等の作成
- ・顧客、財務、プロジェクト管理システムの開発及び提供
- ・下水処理場及び下水管路の運用・維持管理に関するトレーニングの提供
- ・組織構築及び他の技術的な支援
- ・PMU に対する能力開発トレーニングの提供

## ニャットン橋建設事業



株式会社 長大

事業実施者	ベトナム運輸省(第85工事管理局)
対象地域	ベトナム国ハノイ市
資金	円借款(STEP)
実施期間	2007年11月～2015年5月
サービス	・詳細設計 ・施工管理

### 事業概要

ベトナム国では、近年経済成長が拡大する中、道路交通量が増大する一方で道路整備が追いついていないため、首都であるハノイにおいて慢性的な交通渋滞が大きな問題となっています。

ニャットン橋はそれらの交通状況のための新たな架橋ルートを構成するとともに、日越友好40周年、またハノイ遷都1000年を記念し、円借款(STEP)により紅河渡河部に建設されています。供用後はODA案件で建設中の国道3号線と接続し、ハノイ中心部からノイバイ国際空港を繋ぐ首都ハノイの主要幹線道路として機能します。

本事業によるハノイ市を中心とした北部地域の人・物の移動の効率化と渋滞の緩和により、将来ベトナム国経済発展の促進と国際競争力の強化が期待されています。

### 事業内容

主橋	6径間連続鋼桁斜張橋
対象道路	9.95km
橋長	1,500m(主橋)、1,580m(取付橋)
中央支間	400m
幅員	33.2 - 47.3m



## 事務局報告

### － 1 － 第 260 回理事会 報告

日 時：平成26年12月9日(火) 14:00～17:00

場 所：AJCE事務局

出席理事：15名 出席監事：2名

議事(抜粋)：

1. 会員委員会  
変更 個人正会員  
旧 吉田 保 日本工営(株)  
新 田中 弘 日本工営(株)
2. 技術研修委員会  
FIDIC大会報告会  
AJCE杯フットサル
3. 広報委員会  
会報秋号  
HPコンサルティングエンジニアの紹介
4. 国際活動委員会  
契約管理者育成ワークショップ

### － 2 － FIDIC 大会報告会

日 時：平成26年11月6日(木) 14:00～17:00

場 所：日本工営(株)3階A会議室

参加人数：40名

大会テーマ『Innovative Infrastructure Solutions』

### － 3 － スポーツ交流会

第3回AJCE杯 フットサル大会 報告

日 時：平成26年11月14日 19:00～21:00

会 場：都内 フットサルコート

参加人数：8チーム 計60名(内女性1名)

優 勝：日本工営チーム



AJCE 会員企業の若手プレーヤーが集まり熱戦を繰り広げました。

### － 4 － 海外建設プロジェクトの契約管理者育成 ワークショップ 報告

日 時：平成26年11月21日(金) 10:00-18:00

場 所：日本工営(株)3階A会議室

参加人数：28名

内 容：『FIDIC Red Book MDB 2010年版条文解説』  
『ワークショップ』

事例をもとにグループディスカッション  
ワークショップ報告は次号の会報に掲載予定です。

### － 5 － 大学出張講座 報告

日 時：平成23年11月26日(水) 16:00～17:50

場 所：首都大学東京

参加者：80名



AJCE 会員企業の若手が自らの経験をもとにコンサルティングエンジニアのやりがいなどを講演しました。

### － 6 － 技術交流セミナー 2014 報告

日 時：平成26年12月4日(木) 14:00-17:00

場 所：(株)建設技術研究所10階A会議室

参加人数：40名

内 容：『イギリス高速鉄道の契約への道のりと  
今後の課題』 鈴木 學  
『モンゴル国の鉄道建設事業』 仲野 哲人  
『天気予報・数値予報あれこれ』 平木 哲  
『植物工場』 平野 輝美

セミナー報告は次号の会報に掲載予定です。

### － 7 － 行事予定

平成27年

1月 6日(火) 新年賀詞交歓会

2月 10日(火) 第261回理事会

5月 19日(火) 第39回定時総会 学士会館

15:00～17:00(終了後懇親会)

#### －お問い合わせ先－

各種行事・FIDIC 書籍の購入については AJCE 事務局  
までお問い合わせください

(公社)日本コンサルティング・エンジニア協会事務局

〒110-0005 東京都台東区上野 3-16-4

(文行堂ビル3階)

Tel: 03-3839-8471 Fax: 03-3839-8472

E-mail: info@ajce.or.jp HP: http://www.ajce.or.jp

## QBS(Quality Based Selection), QCBS(Quality and Cost Based Selection) 品質・技術による選定、品質・技術と価格による選定

QBSとは、数あるコンサルタントの選定方式のうち、技術プロポーザル（Quality）のみを審査し、技術評価で1位になったコンサルタントが契約交渉の権利を獲得する方式を指す。日本ではプロポーザル方式がQBSに該当する。一方、QCBSとは、技術プロポーザル（Quality）と価格プロポーザル（Cost）の評価点を一定の割合で合計した総合点により、契約交渉の順位を決定する方式を指す。日本では総合評価落札方式がQCBSに該当する。

1972年の米国ブルックス法制定に代表されるように、欧米ではQBSがコンサルタント選定の最良の手段とされてきたが、英国サッチャー政権時の市場合理主義の推進により、世界的にCBSへの回帰傾向がみられ、世界銀行に続きアジア開発銀行も2002年にQBSからQCBSへと舵を切った。

日本においては、1889年の会計法施行以来、一般競争入札（CBS）が公共調達手法として用いられてきたが、2005年の品確法制定を契機に品質の重要性に対する認識が高まり、プロポーザル方式や総合評価方式による発注が拡大してきた。一方、JICAではコンサルタント雇用ガイドを2009年に改訂し、それまでのQBSはQCBSへと変更されるに至った。

国際コンサルティング・エンジニア連盟（FIDIC）では、『コンサルタント選定のガイドライン（1997）』を策定し、一貫してQBS活用の有効性を積極的に提言している。提言では、QBSの利点として費用対効果の高い成果に結び付けられるとともに、技術革新が進展することにより将来の良質なインフラ整備に寄与することが挙げられている。

Lined writing area with 25 horizontal lines and a vertical column of 25 circular punch holes on the right side.

## 編集後記

皆さま、新年あけましておめでとうございます。昨年創立40周年を迎えましたが、新しい10年に向けて、公益社団法人日本コンサルティング・エンジニア協会 (AJCE) がますます発展していくために、さらに活発な広報活動を促進したいと考えます。

さて、この節目の年に新しく広報委員として活動に参加させていただいております。記念誌や広報誌の校正をお手伝いしております。反省をいたしました。これまで、会報等の案内をいただきましても、自分ですべてを読むことは、まずありませんでした。しかし、校正のために、一字一句を確認しておりますと、どの報告やご意見もおもしろく、これまで自己研さんの機会を多く見過ごしてきたと残念な思いをいたしました。

私も、たまに原稿を依頼されることはありますが、今後は、より広く関心をもって会報等の作成、確認をしていきたいと思えます。委員の方々も非常に熱心に企画はもちろんのこと、校正活動をされており、いいものができていると感じています。会員の皆さんがより関心をもって読んでいただけるような企画、情報発信ができるよう努力をしていく所存です。

新年号では、日豪交換研修の報告があり、若手技術者が積極的かつ楽しく(これが大事)交流しているのを見まして、FIDICのリオ大会での若い人たちのプレゼンテーションを思い出しました。若い人たちが、もっともっと参加、活動、発言できるような場ができればと考えます。

2015年(平成27年)1月

(広報委員会 河上英二 記)

会報記事は AJCE ホームページからダウンロードできます。 <http://www.ajce.or.jp>

## AJCE 会報新年号 Vol.38 No.3

2015年1月15日発行

発行 公益社団法人 日本コンサルティング・エンジニア協会 (AJCE)  
東京都台東区上野3丁目16番4号 文行堂ビル3F  
TEL 03-3839-8471 FAX 03-3839-8472  
URL <http://www.ajce.or.jp/> E-mail: [info@ajce.or.jp](mailto:info@ajce.or.jp)

編集 広報委員会

デザイン・レイアウト 株式会社 大應  
東京都千代田区内神田 1-7-5

## AJCE とは (AJCE 定款 第3条 目的 より)

技術に立脚した公正なコンサルティング・サービスを提供する知的専門家(以下「コンサルティング・エンジニア」という。)の品位の確立・技術の向上・国際連携の促進を図り、海外コンサルティング・エンジニアとの技術交流およびその成果の普及に関する事業を行い、コンサルティング・エンジニアの技術の発展と科学技術の振興を通して広く社会に貢献することを目的に活動しています。

## AJCE 沿革

1974 (昭和49) 年 4月	日本コンサルティング・エンジニア協会 設立
10月	国際コンサルティング・エンジニア連盟 (FIDIC) 加盟
1975 (昭和50) 年10月	FIDIC 加盟記念大会 開催 (東京)
1977 (昭和52) 年 8月	科学技術庁 (現 文部科学省) より社団法人として承認される
1991 (平成 3) 年 9月	FIDIC 東京大会 開催
2004 (平成16) 年 5月	AJCE 創立 30 周年記念シンポジウム 開催
2012 (平成 24) 年 4月	公益社団法人へ移行 日本コンサルティング・エンジニア協会に名称変更

## 会員一覧 (2014 年 12 月 9 日現在)

### (法人正会員 37 社)

株式会社 Ides  
株式会社アンジェロセック  
株式会社エイティアイ  
株式会社エヌジェーエス・コンサルタンツ  
OYO インターナショナル株式会社  
大塚エンジニアリング 技術士事務所  
大本俊彦建設プロジェクト・コンサルタント  
株式会社オリエンタルコンサルタンツ  
基礎地盤コンサルタンツ株式会社  
有限会社クープラス  
黒澤 R & D 技術事務所  
株式会社建設技研インターナショナル  
株式会社建設技術研究所  
国際航業株式会社  
創造工学研究所  
田中宏技術士事務所  
中央開発株式会社  
株式会社長大  
株式会社 TEC インターナショナル  
電気技術開発株式会社  
株式会社東京設計事務所  
株式会社東光コンサルタンツ  
東電設計株式会社  
長友機械技術士事務所  
株式会社日水コン  
日本工営株式会社  
日本シビックコンサルタンツ株式会社  
二宮技術士事務所  
株式会社日本構造橋梁研究所  
株式会社日本港湾コンサルタンツ  
パシフィックコンサルタンツ株式会社  
早房技術士事務所  
有限会社樋口コンサルタンツ  
プラント設計株式会社  
ペガサスエンジニアリング株式会社  
株式会社森村設計

八千代エンジニアリング株式会社

### (個人正会員・176 名)

李 相均 独立行政法人国際協力機構  
井口 直樹 長島・大野・常松法律事務所  
大谷 一人 日揮株式会社  
大場 邦久 大成建設株式会社  
甲斐慎一郎 (株)アイ・トランスポート・ラボ  
海藤 勝 株式会社 Kaido&Associates  
掛川 昌俊 グローバル環境エネルギー研究所  
小泉 淑子 シティユーワ法律事務所  
小林 卓泰 森・濱田松本法律事務所  
斉藤 創 西村あさひ法律事務所  
竹村 陽一  
田村 三郎 株式会社フクダ・アンド・パートナーズ  
仲村渠千鶴子 阿部・井窪・片山法律事務所  
並河 宏郷 シティユーワ法律事務所  
丹生谷美穂 渥美坂井法律事務所・外国法共同事業  
茂木 鉄平 弁護士法人 大江橋法律事務所  
森 研二 ライト工業株式会社

### (法人正会員の役職員 159 名)

### (賛助会員・4 社 5 名)

株式会社神鋼環境ソリューション 東京支社  
清水建設株式会社  
水 ing 株式会社  
東日本高速道路株式会社 (NEXCO 東日本)

加藤 武 (一社)海外建設協会  
草柳 俊二 高知工科大学 工学部 社会システム工学科  
サイモン バレット ピルズベリー・ウィンスロップ・  
ショー・ピットマン外国法事務弁護士事  
務所

藤江 五郎 A&G OFFICE  
リチャード クレイ シモンズ・アンド・シモンズ  
外国法事務弁護士事務所

(五十音順)



FIDIC Member Association



<http://www.ajce.or.jp>